



左から 山本久美子さん、堀畑和巳さん、筒井周治さん、馬淵昭次さん



日々のくらしにおりふしに
心に宿る そのおもい
ひとつ言ってみよう
ひとつ書いてみたい
そんな一言

人はその思想を その感情を
言うことができる動物
書き表すことができる生き物
この誌は
そんな人の言

わたしのまわりに こんな事
きのう見つけた あんな事
この誌は
そんな人の言

気楽に—
飾らずに—
力まずに—
書いてみよう”ひとこと”

この詩は、エッセイクラブ
初代会長故高畑智さんが、
エッセイ集「ひとこと」の初
刊（平成8年発行）に寄せた
詩である。
「気楽に、飾らずに、力まず
に」。この高畑さんの言葉
は、ひとことの発刊から13年
経過した今も、エッセイクラ
ブのモットーとなっている。
文章をつづるといって、難
しいこと、面倒なことと思わ
れがちだ。インターネットや
携帯電話でのEメールが主流
となった現代では、日常の中
で、紙に向かってペンを走ら
せる場面は、そうそうない。
でも、書くことは決して難
しいことではないし、その魅
力もたくさんあるとエッセイ
クラブ会員の堀畑和巳さんは
言う。
「文章を書くと言うことは、
自分を表現することに通じま
す。日常の、ちよつとした出
来事を書き留めたり、ふと感
じたことを、それこそ日記の
ような気軽さでそのまま書く
んです。絵を描く人は絵の中
で、踊りを踊る人は踊りで自
分自身を表現するように、わ
たしたちは『エッセイ』とい
う形で、自分自身を表現して

文章をつづることは「自己表現」することでもある
気楽に、飾らず、力まずに書いてみよう

エッセイクラブ

会長 馬淵昭次さん（上長尾） 会員22人

います。だから書き方も、書
く内容も十人十色。わたした
ちはプロの書き手ではないで
すから、自分の好きなように
書いているし、それでいいん
です」。

このクラブが年2回発行し
ているエッセイ集「ひとこと」
を読むと、それが良く分かる。
ある人は日常生活のひとつま
を切り取っていたり、出会っ
た人との思い出だったり、町
の歴史を振り返っていたり、
亡き友人にあてた手紙であつ
たり。ある人がつづった闘病
記などは、涙なくしては読め
ないエッセイだった。そこに
つづられているのは、その人
のリアルな日常、リアルな人
生。ノンフィクションの物語
たちだ。

会員の一人山本久美子さん
は平成11年に入会。「ひとこ
と」への投稿を欠かさない。
「思いついたことを、思った
ままに書いていただけです。
普段、頭の中では難しい言葉
は使わないですし、難しい言
葉がたくさん出てくる本は、
わたしもきらいなんですよ。
ふと空を見上げたときに、ど
こかに行きたいなあと思えば、
自然と言葉が浮かんできます。



会長の馬淵昭次さん

それをそのまま文章にしてい
るだけなんです」とあくまで
自然体だ。
堀畑さんは「自分が書いた
文章が活字となり、製本され
て自分の元に返ってくる。作
品として手元に置いておける
それが何よりうれしいんです。
また、ほかの会員の文章を読
んで、感心することも多いで
すね。刺激になるし、教わる
ことも多い。『ひとこと』には、
文章を書く楽しさと、読む楽
しみ、保存する喜びがありま
す」と、その魅力を語り出し
たら止まらない。

「ひとこと」は、年2回、4
月と9月に発行される。投稿
は自由。テーマも自由だ。
書く時間もさまざまだと会
員たちは話す。
「1時間で書き上げる人もい

心の動きをそのまま文章にす
るのが基本。不必要に文章を
飾り立てないことがエッセイ
を書くときのポイントだ。
堀畑さんは続ける。

「エッセイひとことを通して
新たな友人ができます。文章
を通して、知らない人と会話
が生まれます。そんなところ
も文章の、エッセイ集の魅力
だと思います」。

第1号の発刊から13年、冊
数は26冊に上る。

クラブ初代会長が残した言葉
気楽に—
飾らずに—
力まずに—

この精神は今も会員に受け
継がれている。今日も、気軽
に楽しく文章をつづる人たち
がいる。

【一緒に楽しむ仲間を募集】
エッセイクラブでは、会員を随時
募集しています。年齢、地区、性
別など一切問いません。どなたで
も入会できます。わたしたちと一
緒に活動してみたいという人は、
ぜひご連絡ください。
馬淵昭次 ☎ (56) 0041
筒井周治 ☎ (56) 0824